

「めぐりの森火葬場」にみる公園利用の状況と日常性の受容

日大生産工 ○平松 凌太朗 日大生産工 古田 莉香子

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

日本の人口動態についてみると死亡人口は年々増加し、さらに急速な高齢化により多死社会を迎える。それに伴い火葬場などの葬祭施設の需要は今まで以上に高まっていくと考えられる。しかし火葬場は長らく都市の周縁部に配置され、閉鎖的な施設として計画されてきている。

一方で近年、緑地や公園と一体的に整備されるなど、地域を開き、住民が利用できる施設とする動きがみられるようになっている。このような計画は火葬場を単なる迷惑施設ではなく、地域社会の一員として位置づけ直す試みとして注目される。

そこで本研究は、めぐりの森火葬場に一体開発された「イイナパーク川口」の利用実態を明らかにし、その空間が住民にどのように日常的に受容されているか、その空間が地域において持つ意義を考察する。現地観察や利用者調査を通じて得られる知見を基に、地域と共に存する公共空間としての火葬場のあり方を提示することを目的とする。

1-2 先行研究との関係

先行研究^{注1)} ^{注2)}では「めぐりの森火葬場」において、建設当時の担当者への聞き取りや周辺環境の調査、さらに議事録や市民要望に関する資料を分析することで、公園と一体化した火葬場が現状の課題解決に寄与する可能性を持つことを明らかにしている。また図面や写真、言説を基に設計意図を分析し、火葬場のオープンスペースが遺族のプライバシーを確保しつつ地域住民の利用も考慮する設計的工夫を有していることを示している。これらの研究は、火葬場が地域社会に受け入れられる可能性を持つことを示すものであり、本研究の基盤となっている。一方で、公園利用の実態や住民の受け止めについては具体的な研究は限られている。本研究を通して現地調査やヒアリングをもとに、公園の実態と意義を明らかにする点で新たな視点を加える。

2. 研究の概要

2-1 研究の方法

本研究では、「めぐりの森火葬場」に隣接したイイナパーク川口を対象に現地調査を通じてその実態を把握する。また、公園利用者への簡易的なヒアリング調査を行い、住民がどのように火葬場に一体の公園やその火葬場を捉え、どのように日常生活に位置付けているのかを明らかにする。調査は、利用人数が多いと予想される夏の平日・休日の計2日間(9月1日(月)、6日(土))、公園開園時間の9時~18時に行う。これらの調査結果を総合的に分析し、公園と火葬場の関係性や地域における意義を考察する。

2-2 対象施設概要

「めぐりの森火葬場」は市営火葬施設と約9haの公園(イイナパーク川口)とが一体となった開発である。敷地内には火葬施設のほか、歴史自然資料館や地域物産館も併設され、これらの施設が公園の自然環境と調和するように配置されている。特に、台地と低地が複雑に入り組んだ谷戸地形を活かし、公園を散策する際には、それぞれの施設が植生や地形に溶け込み、見え隠れする景観が意図的に設計されている。火葬施設である2階建て高さ1.3mになる火葬炉建屋は、低く自由な曲線を描く屋根によって周囲と調和させ、池の上に低く浮かぶ丘のように設計されている。建物の周囲には植栽が施され、柱の上部にも緑が配されており、公園の植生と一体となった連続的な景観が形成されている。これにより、自然と建築が融合した調和のとれた空間が創出された火葬場といえる。

3. 観察調査からみる公園の実態

3-1 公園の空間構成

公園内の建築の配置や緑地、動線計画、ベンチや遊具といった施設の整備状況を整理する。そして、それらが火葬場に隣接するという立地条件とどのように関わり、公園空間に独自の性格を与えていているのかについて考察する。

The Acceptance of Everyday Life and Park Usage Patterns Observed at Meguri no Mori Crematorium

Ryotaro HIRAMATSU, Rikako FURUTA

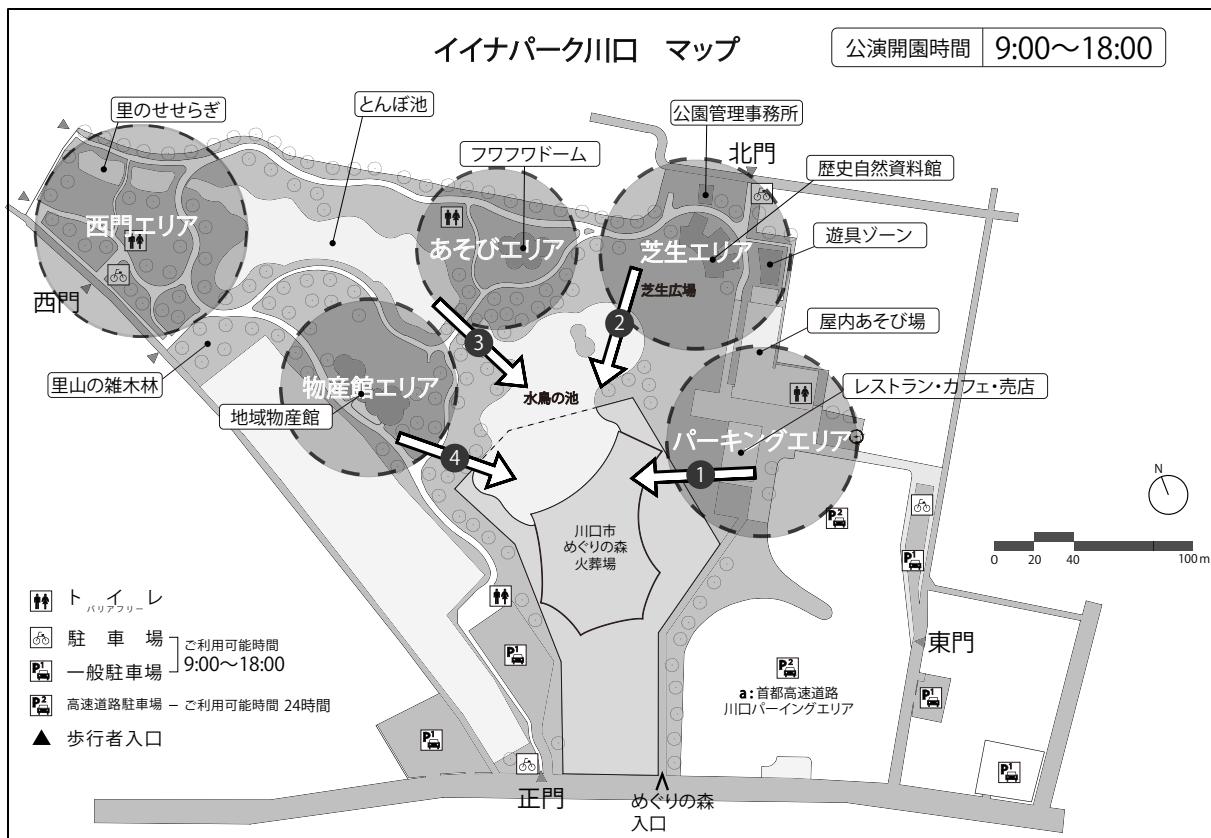


図1 公園内エリア別図

図1に公園の配置図を示す。公園へは、東側に2箇所、南側に1箇所、西側に4箇所、北側に1箇所の計8箇所の入り口を持ち、めぐりの森火葬場は南側に1箇所の入り口を持ち、公園への入り口とは別となっている。

本公園は、敷地中央に「川口市めぐりの森火葬場」を核として配置し、その周囲に多様な施設や自然環境が環状に展開されている。東側には川口パーキングエリア（レストラン・カフェ・売店、屋内あそび場）、遊具ゾーン、歴史自然資料館などの利用施設群が集積し、正門および東門からの来訪者を受け入れるエリアを形成している。一方、西側は里山の雑木林や里のせせらぎ、とんぼ池など、自然環境を活かしたエリアが広がり、地域物産館と連続する形で環境学習や交流の場を担う。北側には芝生広場やフワフワドームが配置され、遊びと休養の場が確保されている。園路はこれらの施設を相互に結び、利用者が中心の「めぐりの森」を囲むように巡る動線計画となっており、自然とそれぞれの施設の共存を図るランドスケープが展開されている。公園利用者の動線と火葬場の機能とを過度に交差させないよう配慮しながらも、空間全体として「死と日常」が共存する場を意図的に計画したものと考えられる。

3-2 公園の利用状況

平日と休日に行った観察調査を通じ、公園利用者の人数と属性、活動内容を記録し、利用パターンを把握する。そこから公園が地域の生活において果たしている役割や火葬場隣接という条件下での利用のあり方について整理する。

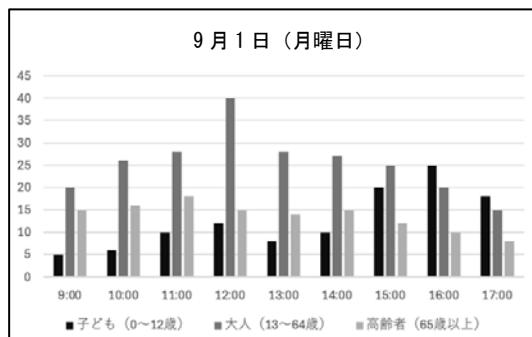


図2 9月1日 (月曜日) の公園利用者

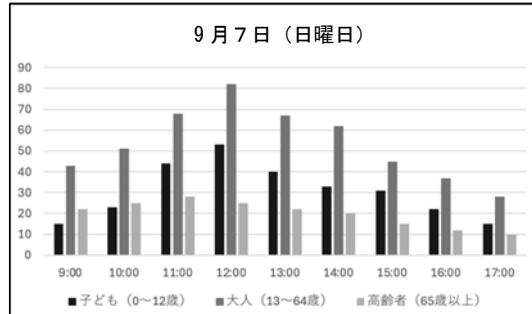


図3 9月7日 (日曜日) の公園利用者

表1 9月1日 公園利用者ヒートグラフ

	芝生エリア	あそびエリア	物産館エリア	西門エリア	パーキング
9:00	4	6	8	6	16
10:00	6	7	10	7	18
11:00	7	7	14	8	20
12:00	20	8	17	7	15
13:00	15	5	13	7	10
14:00	17	5	14	7	9
15:00	17	17	10	6	7
16:00	18	15	8	5	9
17:00	4	4	6	4	23

表2 9月7日 公園利用者ヒートグラフ

	芝生エリア	あそびエリア	物産館エリア	西門エリア	パーキング
9:00	18	22	14	8	18
10:00	22	26	18	8	25
11:00	37	34	23	12	34
12:00	42	41	31	15	31
13:00	36	28	30	10	25
14:00	34	26	25	8	22
15:00	28	22	16	6	19
16:00	20	18	12	5	16
17:00	8	9	7	4	25

図2・表1(9月1日)と図3・表2(9月7日)を比較すると、平日は午前中に大人・高齢者が芝生エリアやパーキングエリアを中心に利用し、正午には大人が芝生エリアに集中する。午後は子どもの利用が増加し、15~16時に芝生エリアやあそびエリアでピークを迎える。これは放課後の時間帯に対応した児童の活動と一致している。一方、休日は利用者数が全体的に多く、午前から多世代が同時に公園を利用している。特に正午は大人・子どもともに多くみられ、芝生エリア・あそびエリア・パーキングエリアで賑わいを示す。以上の結果から、平日は世代ごとに利用する時間帯や場所が異なりながらも、一日の中で順に空間を共有する場となっており、休日は一日を通して多世代が同時に利用・交流する場として機能していることがわかる。

3-3 公園からの視認性と火葬場の存在感

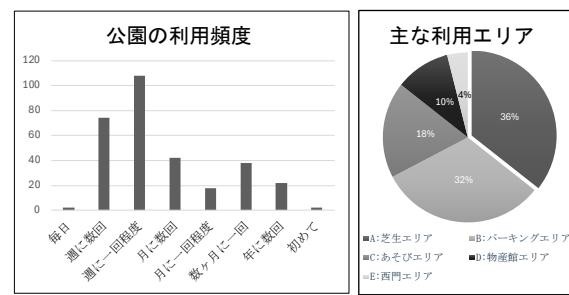
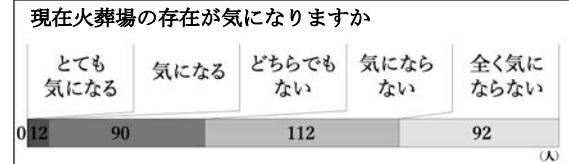
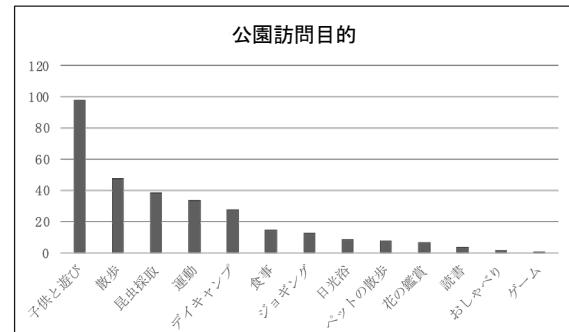
公園の内部から火葬場がどの程度視認できるのか現地観察を通じてその存在感を把握する。公園の各エリアにおける視認性を整理し、火葬場の建築的スケールやランドスケープとの関係を明らかにする。

**図4 各エリアからの視認性**

パーキングエリアおよび芝生エリアからは、火葬場が比較的明確に視認できる場所である。パーキングエリアにおいては、アイレベルと火葬場の屋根の高さが同一に調整され、建築内部が見えないよう配慮されている。一方、芝生エリアからは火葬場の内部まで見通すことが可能であるが、水景を挟むことで物理的な距離が確保され、利用者の活動に大きな影響を及ぼさない空間的工夫がみられる。これに対して、あそびエリアでは草木による植栽帯が屏状に配置され、火葬場の姿を完全に遮断している。また、物産館エリアからは木々の隙間を通じて建築がうっすらと視認できる程度に留められている。以上のように、公園のエリアごとに火葬場の視認性には差異があり、ランドスケープ設計によってその存在感が調整されていることがわかる。

3-4 利用者へのヒアリング結果

利用人数が多いと考えられる平日の夕方と休日の昼時に公園利用者(合計306人)へ簡易的なヒアリング調査を行い、住民がこの公園をどのように受け止め、日常生活の中に位置づけているのかを整理する。

**図5 利用頻度と主な利用エリア****図6 住民の施設への認識図****図7 住民の公園訪問目的**

調査結果から、利用頻度は「週1回程度」や「月数回」が中心であり、芝生エリアやパーキングエリアなど人の動きが活発な場所が主な利用場所であることがわかる。訪問目的では「子供と遊ぶ」が最も多く、次いで散歩や運動、自然観察など多様な利用が確認できる。また、火葬場の存在についての意識では「気にならない」「全く気にならない」とする回答が過半を占め、「とても気になる」とする強い否定的意見は少数である。さらに、火葬場が視認できる芝生エリアやパーキングエリアにおいても、ランドスケープ設計や樹木による視線の緩衝帯、また水景による物理的距離の確保などの工夫により、利用者に火葬場が隣にあることへの視覚的負担は与えていないことがわかる。

肯定的な意見として「最初は驚いたが静かで落ち着ける雰囲気がある」「緑に囲まれ綺麗に整備されており、居心地が良い」「従来の火葬場のようなデザインとは違い火葬場を感じさせない見た目は、実際に目に入っても圧迫感がない」などがあるが、反対に否定的意見として「公園としては楽しい場所ではあるが子どもに説明しづらい」「自分たちが遊んでいる最中に火葬が行われると考えると気分が重くなる時がある」などの意見もある。火葬場という施設の性格上、その存在自体がもたらす心理的な負担は完全に消失しているわけではなく、利用者によってはいくら自然環境や視認性に工夫がなされても意識の片隅に死や喪失を思わせる場所・要素ともなり得ることがわかる。

4. 公園利用の実態について

①観察調査からみる公園の実態

観察調査の結果、公園は芝生エリア・パーキングエリア・あそびエリア・物産館エリア・西門エリアといった多様な空間構成を有し、それぞれに異なる利用特性がみられる。芝生エリアやパーキングエリアは人の往来が多く、火葬場が視認可能な位置にあるが、植栽や水景による緩衝効果により公園の景観の一部として適度に存在を認識させる設計的意図の表れと考えられ、利用者の行動に大きな影響は確認されない。一方であそびエリアでは植栽によって火葬場が完全に遮蔽され、活動に集中できる環境が確保されている。このことから、エリアごとに異なる景観的操作が行われ、火葬場が利用者の日常的行動に調和するよう計画されていることがわかる。

②ヒアリング結果からみる住民の意識

ヒアリング調査の結果、公園利用者は火葬場の存在に対して肯定的・否定的双方の意見を抱いている。特に否定的な意見は限定的なものであり、火葬場と日常的利用空間の共存には一定の心理的ハードルが残されており、火葬場が有する機能的特性に起因する心理的負担が、完全には解消されていないことを示している。

以上を踏まえると、公園に隣接する火葬場の存在は、緑地環境やランドスケープデザインを通じて一定程度まで日常空間に受容されているものの、その本質的な意味合いからくる心理的影響を全て払拭することは難しいといえる。しかしながら、この両義的な評価こそが、公園と火葬場の共存が持つ独自の性格であり、日常性の中に死を内包するという都市空間の新たな可能性を示している。

5. まとめ

観察調査とヒアリングの両面から、公園と一体化した火葬場は、計画的な視覚的配慮と利用者の多様な行動を支える空間構成によって、日常生活の中で受容されている実態が確認できる。従来「迷惑施設」とされてきた火葬場も、周到な環境設計を伴うことで、地域に開かれた日常的空間の一部として位置づけられる可能性を持つ。しかし同時に、利用者の属性や活動内容によっては公園の景観の一部として適度に存在を認識させる設計的意図が否定的に受け取られる可能性も存在し、今後は利用者の多様な視点を考慮したさらなる設計的配慮や運営上の工夫が求められると考えられる。すなわち、めぐりの森火葬場は、火葬場を地域社会に開き、日常性の中で受容される可能性を提示すると同時に、今後の課題を検討する上で重要な事例となりうる。

【注】

(注1) 平松凌太朗、古田莉香子、広田直行：「火葬場設置における合意形成成功事例からみる計画的要件に関する研究」第56回日本大学生産工学部学術講演会 2024年12月

(注2) 平松凌太朗、古田莉香子、広田直行：「近年の火葬場における日常利用を考慮したオープンスペースの設計手法に関する一考察 一公園一体型の火葬場「めぐりの森火葬場」を対象として」日本建築学会大会〔九州〕2025年9月

【参考文献】

(1) 川口市めぐりの森ホームページ

<http://www.kawaguchishi-megurinomori.jp>

(2) 川口市ホームページ

<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01120/035/iinakawaguchi/34754.html>